
光と闇

ミーさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇

【Nコード】

N6895X

【作者名】

ミーさん

【あらすじ】

あの闘いから17ヶ月過ぎた。死神の力は皆のお陰で取り戻し家族や友人達を失わずに済んだ。だが…

虚（前書き）

初です。

グダグダですが、宜しく願います。

虚

月の光を浴びながら屋根を駆け抜ける一人の青年がいた。上下黒い着物に身を包み、背中に見えるのは大きなサラシの用な物に巻かれた大刀…一番目立つのが風に靡くオレンジ色の髪。

駆け抜ける先には仮面をつけた虚と呼ばれる化け物が一匹。

「地域担当は何やってんだ」

青年は、そんな化物に追い付き背中にある無骨な大刀を手に取り布が巻いてあつた晒しがサラサラと解かれる…と同時に虚目掛け一気に降り下ろす。

「グオオオオオー」

虚は断末魔の叫びとともに塵の用に消えていく。

「ふう…イツチヨあがり」

月の光に照された人物こそ死神・黒崎一護であり将来隊長と噂されている人物である。

目次（前書き）

続きです。

日常

「ゲツモーニーンー護！！」

と、ドアから勢い良く飛び蹴りを繰り出して来たのは一護の父・黒崎一心である。普段お茶ら毛て見えるが家族の事を第一に考える（娘達限定？）良き父親でありそして死神でもある。一護は、その飛び蹴りを交わすと手を顔面に充て床に叩き落とす。

「朝っぱらから毎度毎度何考えてやがる！！このクソ親父！！」

「何を言う！父さんのスペシャルファイティングドロップキック（長い！）を何故避ける？！」

「うるせー朝っぱらから近所迷惑何だよ！！少しは大人しくしやがれ！！このクソ親父！！」

ボキバキボキ！

「ギャー！！！！」

と、言う悲鳴が朝から木霊した。

「お兄ちゃん！ご飯出来たよ〜！」

と、下から遊子の声

「おう、今行く！」

「あれ？お父さんは？」

「上で伸びてるんでしょうどうせ直ぐ復活するって掘ったときな遊子」

「ふうーん。そ」

何とも素っ気ない娘達である。だが、娘達の聴こえたのか？

「遊子夏梨どうして父さんにそんなに冷たいんだ〜！？父さん悲しい！」

「ほら復活した」

「母さん娘達が思春期なのか娘達が構ってくれないよ〜」

と、言いながら真咲遺影特大ポスターに向かって泣き真似をする一心。

其をよそに、

「さ、ご飯食べよ。」

「」「頂きます。」「」

「……！母さ〜ん！娘達が冷たいよ〜」

「「一生やってる！！このバカ親父！！！」」

「ね〜！速くご飯食べちゃってよ！片付かないでしょ！」

「・・・はい・・・。」

食事を終え

「行つてきます。」

「そんじゃ、俺も行つてくるぜ」

遊子も夏梨も霊力が有り遊子はウツスラしか見えてなかった霊ははつきり見える用になり、また夏梨は霊的濃度が更に磨きがかかった。空座町は、そんな霊的濃度の高い人が多いため死神が重点的に見廻りをしてきている。

睡魔（前書き）

携帯だとちょっと厳しいね。

睡魔

「夏梨ちゃん…起きて…ねえ、起きてっば…」

遊子が揺り起こす。

「うう…ん…誰？」

寝惚けていた為かいきなり遊子の腕をおもいつきり掴んだ！

「痛いよ！夏梨ちゃん！」

少しの間ぼんやりしていたが、臆て覚醒し…

「あれ？」

「もうお昼だよ！夏梨ちゃん。翠子ちゃんと一緒に食べよ！早くしないと時間が無くなっちゃうよ！」

「うん、分かった」

そう言いながら翠子と三人で食べ始めた。

ふと遊子と夏梨は何げなく窓の外を見た。

「ねえ？二人してどうしたの？」

翠子は二人が同じ方向を向いて惚けーとしていたので聞いた。

「「え？」」

「だつてさあ〜二人して窓の外なんか見ちゃつて…何か見えるの？

……まさか！…また幽霊！？」

「「…うん」」

「やっぱりね。だと思つた。最近、二人して同じ方向見たり、それに双子だからかな？夏梨は、前から幽霊さんはつきり見えてるのは分かつてるけど…遊子つてそれほどでも無かつたでしょ！

「あと、授業中先生には分からない用に居眠りしてるよね。先生の目は誤魔化しても私の目は誤魔化せないよ！二人ともホント〜に大丈夫？」

普段、遊子も夏梨も授業中滅たに寝ることはない。だが、此处最近眠くて眠くてしょうが無いのだ。

「「……………」」

二人して何も言えずに、遊子と夏梨は、顔を見合せた。

その頃、虚を発見した。

エリート死神？アフロさん？いやいや多分芋山さんだ！！

「えーい！このエリート死神！車谷源之助を嘗めるなー！！」

「それと名前を間違えるんじゃないぞ！チキシヨーー！」

と、虚を倒していた。

存存（前書き）

最近？コソの姿が見えないような？

存存

「ねえ夏梨ちゃん…私たち最近変だよな。授業中に居眠りしちゃったり朝早く起きれなかつたり…って聞いている？夏梨ちゃん！」

「?…うん。」

夏梨と遊子は、下校途中歩きながら話していた。だけど何処か夏梨は上の空…

「此の儘続いたら授業に付いていけなくなっちゃおうよ！」

遊子と夏梨は困っていた。それは、本当に遊子が言った事は、間違いでは無いし、自分も勉強に付いていけなくなるのは嫌だ。それに夢の事も気になる。

まあ、夢と言っても全て覚えて居る訳でわない。

二人は、何故かは分からないが最後は誰かの手が目の前に差し出され、その手を掴もうとした所で目が覚めるのである。

「「ただいまー」」

「おう、おかえり。」

今日は、カレーだからね。

と、言いながら着替えをしに二階に…

「夏梨ちゃん、お父さん、…あれ？まだ、お兄ちゃんまだ帰って来てないよね？」

「遊子！はい、これ！」

夏梨は、驚掴みにしたコンを遊子の前に差し出した。

「キヤー！ポストフー！」

遊子は、コンをギューと思いつきり抱きしめた。

「（グオ！イジゴ！…ハ、ハヤク！カエツギヤー）」

夏梨は、満面の笑みをしながら…

「あー！お腹すいた。」

と、言いながら遊子が装ってくれたカレーをテーブルの上に並べた。

その後で見ていた一心は、ニヤニヤしながら笑いを堪えていた。

「（この際、誰でも良い！だずげでー！）」

コンの心の声が響く事は無かった…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6895x/>

光と闇

2011年10月19日02時10分発行